

# 「アカデミズムとムラ社会」

理事 兼 副学長

伊 藤 洋

この春、A大学に勤務する友人から、彼の所属する学部の学部長選挙で、その公約？に「ムラ社会からの脱皮」を掲げている有力者がいて、実に新鮮なキャッチコピーなので彼を支持しているのだ、というような話を聞いた。まさか、アカデミズムに「ムラ社会」はないだろうと思われるが、さにあらず、私達は無意識にムラ社会を作ってそこに安住しているのだ。その構造を分析したのが、阿部謹也先生の名著『学問と「世間」』と『日本人の歴史意識』（いずれも岩波新書）である。

1915年、東北帝国大学の八木秀二教授と弟子の宇田新太郎助教授は、後に八木・宇田空中線と呼ばれる極超短波アンテナを発明し、これを使って仙台の青葉城から牡鹿半島突端にある金華山まで通信を試みて成功した。アルミニウム円柱をアレイ構造に配列しただけの単純な形状のアンテナが、後に世界中の家庭の屋根に設置され、TV受信アンテナとして人類必須の機器となった。しかし、そうなるまでに歴史は激烈な時を刻んだのである。

両先生は、画期的発明に興奮し、これを論文にして電気学会に投稿した。だが、むなしく返戻という判定で突っ返された。理由は、重工業の発展に注力している時代に、アルミニウムを丸めただけの機器は軽工業以外の何者でもないというのである。失意の二人は、これを英語に直し、JAPという米国の応用物理学会に投稿し、そこに採録された。

こんな「事件」も忘れられた1927年、同じ八木秀二門下の岡部金次郎教授は高周波磁電管（マグネトロン）という極めて効率の高いマイクロ波発振管を発明した。当然、前記の国内学会に投稿したが、ここでも同じ理由で返戻とされた。そして同じようにJAPに投稿し直して採録された。歴史は見事なまでに繰り返したのである。

さて、日米の戦争が熾烈さを増した1943年になると、日本の連合艦隊は南太平洋における制空権を完膚なきまでに連合軍に奪われた。出撃する飛行機という飛行機が常に待ち伏せに遭うのである。なぜ、こんなに正確に出撃情報が敵に分かるのか？

この謎は、敗戦後すぐに明らかになった。あの、岡部が発明した磁電管を、AT&Tベル研究所のハルが改良して強烈なVHFパルス発振マグネトロンに改良し、これを八木宇田アンテナに接続してそのシャープな指向性を利用してレーダーとし、飛来するゼロ戦を完璧に捕捉したのである。

「重工業重んずべし、軽工業軽んずべからず」と政府は言ったが、学会を指導した一握りの学者集団はムラ社会を作ってここに立てこもり、道を誤ったのである。他山の石として、肝に銘じたいものである。学部改革も、ムラ社会の解体から始まるのであり、聞いていないが件の人物が選ばれたのなら、A大学の改革は能く、速く、確実に進むことだろう。